

マルチ栽培で加工用ばれいしょの収穫前進化

【平成 28 年 10 月 12 日掲載】

三原市久井町の（農）たかさご（田坂正夫（たさかまさお）代表理事，構成員 28 名）では，所得向上を目指して加工用ばれいしょと大豆の 2 毛作に取り組んでいます。ばれいしょの収穫期は梅雨時期にあたるため，収穫作業が遅れ，大豆の播種が 8 月にずれ込むことも珍しくありません。

そこで，広島県園芸振興協会の展示圃事業を活用して「早期マルチングと全量基肥施用による加工用ばれいしょの作期拡大技術」に取り組みました。マルチングの利点は①地温上昇による初期生育の促進，②土壤水分の調節，③肥料流亡防止，④雑草抑制です。慣行区（20 a）では入梅後の長雨と日照不足のため，塊茎肥大期に茎葉が早期に黄化し，滞水によるいもの腐敗などが目立ち，収量や品質に悪影響を及ぼしました。一方，マルチ区（20 a）では慣行区と比較して収穫時期が 7 日程度早まり，収量は約 4 割も多いという好成績を得，マルチ栽培が天候の影響を最小限に抑える有効な技術であることが実証されました。

マルチング作業に必要な労務や処分費用などは負担増ですが，ばれいしょの収穫の前進化により，後作大豆の適期播種作業が可能になり，大豆の収量向上も期待されます。東部農業技術指導所では，これらの結果を踏まえて，今後開催される出荷反省会や栽培講習会などを通じて技術普及を図ります。



出荷検討会で収量や品質を確認



後作の大豆「あきまる」の生育も順調

（播種日：平成28年7月19日）